

# 意図は独特な心的状態か

佐藤 広大 (Kodai Sato)

慶應義塾大学・日本学術振興会特別研究員 DC

意図は、欲求と信念の組に還元されるのか。それとも、そのような組に還元されない独特な心的状態なのか。この問いは、現代行為論のなかで繰り返されてきた。

たとえば、この問いに関する考察のなかで古くから有名なのは、D・デイヴィドソンのものである。当初、デイヴィドソンは次のように考えていた。行為の基本理由 (primary reason) である欲求と信念が行為を因果的に説明する。そのため、欲求と信念から独立した意図は必要ない。つまり、意図は欲求と信念の組に還元される、と (Davidson 1963)。しかし、後にデイヴィドソンは、未来向きの意図を分析して、意図は欲求と信念の組に還元されない独特な心的状態だと主張するようになる。デイヴィドソンによれば、意図と欲求は同じ部類の価値判断だが、欲求が一応の (prima facie) 判断であるのに対して、意図は全面的な (all-out) 判断である (Davidson 1978)。

デイヴィドソン以降も、意図が独特な心的状態であるかどうかをめぐる議論が続けられてきた。意図が独特な心的状態であることを支持する論者としては、M・ブラットマンや K・セティヤなどが有名である (Bratman 1987; Setiya 2007)。ブラットマンやセティヤは、意図を欲求と信念の組に還元してしまうと、意図に関するいくつかの事実が説明できなくなると主張した。たとえば、意図は振舞いを制御する。しかし、ある振舞いをある時点  $t$  でしたいという強い欲求と今が  $t$  だという信念を持っていたとしても、その振舞いがなされて制御されるとはかぎらない。

こうした主張に手際よく明晰に反論したのが N・シンハバブである (Sinhbabu 2013)。シンハバブは、意図が欲求と信念の組に還元されると主張する。その際に、ブラットマンやセティヤが挙げていた意図についての事実を、欲求と信念の組だけを使って説明する。たとえば、ある振舞いがなされるのは、その振舞いをある時点  $t$  でしたいという強い欲求と今が  $t$  だという信念を持っていることに加えて、その強い欲求と手段や目的に関する信念が実践推論を通じて組み合わされたときだとシンハバブは主張する。

たしかに、シンハバブの主張はもっともらしい。ブラットマンやセティヤなどが、意図にしか説明できない事実だと考えていたものは、意図を欲求と信念の組に還元するシンハバブのモデルでも説明することができる。しかし、シンハバブのモデルには全く問題がないのだろうか。これが本発表の問いである。

この問いを考えるさいに鍵となるのが、心的状態を別の心的状態に還元することについてのシンハバブの立場である。シンハバブは、意図が欲求と信念の組に還元されることには賛成する。しかし、欲求と信念の組がさらに欲求か信念のどちらかに還元されることには反対する。心的状態を還元することに対するこのようなシンハバブの不徹底さが、シンハバブを不安定な立場に置いていると発表者は考える。

本発表は、意図を欲求と信念の組に還元するシンハバブのモデルの問題点を探ることを通じて、ある心的状態について分析したり、その心的状態を別の心的状態に還元したりすることは結局何をしているのか問うことにもなる。心的状態を分析したり還元したりする作業は、ただ単に言葉の使い方を問題にしているだけなのだろうか。そして、それらの作業はどのような目的でなされているのだろうか。本発表では、どのような目的でなされているのかという観点から、シンハバブのモデルの限界を明らかにする。

#### 参考文献

- Bratman, M. (1987), *Intention, Plans, and Practical Reason*, Harvard University Press. [『意図と行為』, 門脇俊介・高橋久一郎訳, 産業図書, 1994年.]
- Davidson, D. (1963), “Actions, reasons, and causes,” in Davidson (1980), 3-19.
- (1978), “Intending,” in Davidson (1980), 83-102.
- (1980), *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press. [『行為と出来事』, 服部裕幸・柴田正良訳, 勁草書房, 1990年.]
- Setiya, K. (2007), *Reasons without Rationalism*, Princeton University Press.
- Sinhababu, N. (2013), “The desire-belief account of intention explains everything,” *Noûs* 47 (4), 680-696.
- Tolvanen, P. (2019), “Intentions in tension: Is there more to intentional action than just belief and desire?” Master’s Thesis, University of Helsinki.